# 1

西新宿二丁目にある高層ホテルの、一階コーヒーラウンジに現われた男は、青紙専門の故買屋だった。

奥に向かって細長い造りのラウンジは、入口の部分に巨大なシャンデリアが吊りさげられているほかは、各テーブルにおかれた小さなランプが照明になっている。

シャンデリアの下で一瞬立ち止まった男を、鮫島は背中を向けたまま観察した。鮫島の位置からだと、エレベーターホールの壁にとりつけられた大きな鏡で、ラウンジの入口を見てとれる。

男は、淡いグレイのストライプの入ったシャツに紺のネクタイを結び、上品なツイードのスーツを着こんでいた。左腕に畳んだコートを抱え、右手でセカンドバッグをもっている。中には携帯電話が入っている筈だ。

男の名前は、三森といった。

法律用語では贓品と呼ばれる盗難品の手配書を品触という。品触は、贓品をすみやかに発見するための、被害品の通知書で、古物商や質屋に流し、手配する。

この品触には「特別重要品触」「重要品触」「普通品触」の三種類があり、それぞれ用紙が、赤、青、白に、分けられている。

「重要品触」の対象となる被害品は次のようなものだ。

殺人、強盗等、凶悪事件の被害品、重要文化財、被害額百万円以上、あるいは五十万円以上の常習と認められるもの、社会的影響の大きい事件の被害品。

故買屋には、扱う品を限定している、専門とそうでない者がいる。専門は、たいてい宝石や時計などの貴金属で、三森は、専門をもたない故買屋だった。そのかわり、扱う品の金額や量が大きい。

三森は、まっすぐにラウンジの奥に向かって進んだ。観葉植物でさえぎられ、鮫島の位置からでは見えない男の向かいに腰をおろした。

「奴がそうだ」

鮫島は向かいにすわる滝沢にいった。滝沢は少し驚いた顔になった。

「若いな」

「若いとも。けいずかいのニューウェーブだ。年齢は、俺やあんたとかわらん」

「俺はもっとセコい親爺かと思ったよ。こそこそして、因業な面つきをしたような」

「奴は派手に商売をしているわりには、なかなか尻尾をつかませない。決まった事務所をもたないで、都内のホテルをぐるぐると回りながら、こうして商談をやってる」



新宿鮫　屍蘭

「モノはどこにあるんだ？」
「トラックの荷台、コンテナ、倉庫、フェリー、一ヵ所に集めないで、常に動かしつづけている。ガサ入れをかけても、なかなかおさえられない」
滝沢は馬鹿にしたように、顎をひいた。その仕草を見つめ、鮫島はこの男が大学時代から、少しもかわっていないのを感じた。
滝沢は学生の頃から、妙に老け、オヤジ臭い奴だと思われていた。いっけん横柄に見える、その仕草のせいだったかもしれない。人に意見をいうときは押しつけがちで、相手のいうことにはあまり耳を傾けない、というところもあった。
滝沢は、鮫島とともに上級公務員試験を受けた同級生だった。が、試験に落ち、翌年も落ちると、国税庁に就職した。
それを聞いたとき、鮫島は意外な気がしたものだった。
国税は、警察以上に、キャリアとノンキャリアの待遇に差がある職場だったからだ。
国税庁のキャリアには、省キャリアと庁キャリアの二種類がある。省キャリアとは、大蔵省に入省し、国税庁に配属された者、庁キャリアとは国税庁に直接入庁した者のことだ。当然、省キャリアのほうが優位で、たとえば東京国税局では、局長、部長、課長は、省キャリアが占める。次長クラスにいたって、ようやく庁キャリアのポストとなる。また、国税局は、全国に十一あるが、そのうちノンキャリアが局長をつとめるのは一ヵ所しかない。庁キャリアですら、二、三局である。それ以外は局長につくのは、すべて省キャリアである。





ノンキャリアにひとつだけ局長ポストを用意するのは、やる気を失わせないための措置で、いかにも内務官僚的な発想といってよいだろう。
警察組織の場合、ノンキャリアでも、警視正、警視長クラスにまで昇っていくケースは、まれにないではない。が、国税組織では、省キャリアの下に庁キャリアという〝壁〟がある以上、ノンキャリアの出世は、そこでストップしてしまう。したがって、全国でただひとりのノンキャリア局長というのは、象徴にしかすぎないのである。
ところが滝沢は、国税庁に入庁すると、査察を希望した。国税庁における査察部門はエリートコースではない。なぜなら査察は、査察のみの人事で終わるケースが多く、しかも査察出身者は、退職して税理士を開業したとしても、実務に不慣れだというハンディを背負うことになる。
数日前に滝沢から呼びだされ、鮫島が渡された名刺には、
「東京国税局、査察部、査察第五部門、査察官、滝沢賢一」とあった。
『第五？』
訊ねた鮫島に、滝沢はめんどうくさそうに説明した。
『査察は、第三十四まで部門がある。このうち、一から十五までが、情報担当で、二十一から三十四までが実施なんだ。俺たちはせっせと拾い、そいつらがガサをかける』
『で、何の用だ』
滝沢は訊ねられ、体をのばした。鮫島の自宅に近い、中野駅前の喫茶店だった。

『知ってのとおり、俺たちは警察をいっさい信用しない。おたくらに内偵の話をすると、必ず対象に情報が流れるからな』

事実だった。国税庁査察部、通称マル査の内偵は、警察にその内容が流れることはない。内偵をすすめ、立件できそうだという感触を得ると、マル査は地方検察庁の特捜部に話をもっていく。そこで家宅捜索の令状が発行され、いわゆるガサ入れにはいるとき、抵抗が予想される場合、初めて警察に身辺警護等の依頼をおこなって、警察はその件を知ることになる。

地検は当然、警察とも接点がある。が、検察官たちもまた、マル査の内偵対象についての情報を警察官に話すことはしない。

『俺たちがマル査にきていちばん最初に教えられることが、警察は信用するな、だ』

滝沢の言葉に鮫島は無言だった。

マル査が動く、不動産、金融などにからんだ大がかりな脱税には、必ずといってよいほど暴力団がかかわっている。

刑事は、脱税の容疑者に興味はない。それは地検の獲物（えもの）だと思っているからだ。刑事の興味の対象は、恐喝、傷害、監禁、殺人などの容疑者である。

マル査の獲物が、個人をも含めた組織、という形をとっているのに対し、警察の獲物は、あくまでも個人である。したがって、個人の情報を得るために、刑事は情報提供者に〝恩を売る〟必要がある。マル査の内偵情報は、そうした取引材料にぴったりなのだ。





この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。